

第10期県民生活審議会 第2回総合政策部会（概要）

- 1 日時 平成26年8月27日（水）10:00～12:00
- 2 場所 兵庫県民会館303号室
- 3 出席者 委員：鳥越会長、小西副会長兼部会長、岩木委員、大前委員、玉谷委員、野崎委員、森委員、山口委員、山下委員、吉田委員
ゲストスピーカー：ふるさとづくり青年隊事業採択団体
（伊丹商店連合会（伊丹市）、大路未来会議（丹波市））
県側：藤原政策部長、横山企画県民部参事、柳瀬県民生活局長、
 瀬上県民生活課長、木村協働推進室長、竹村青少年課長、
 久戸瀬県民生活課副課長、県民局・県民センターほか関係職員

4 内容

（1）政策部長挨拶

- 本日は大変お忙しい中、早朝からお集まりいただき、お礼申し上げます。
- 県民生活審議会は、本年2月に第10期が発足した。2月に全体会、6月に第1回総合政策部会を開催し、ふるさとづくりの広がりに向けて様々な角度からご審議いただいております。これまで、数多くの貴重な視点やキーワードをご示唆いただきました。
- 前回の総合政策部会では、将来の地域社会を担う若者と、地域との関わりについて掘り下げて考えてみてはどうかとのお話をいただきました。
- 本日は、地元青年と他地域青年との連携による地域課題解決の取組を通じて、ふるさとや地域貢献の関心を高め、地域づくりの核となる人材育成を図る「ふるさとづくり青年隊事業」の採択団体の中から、2団体の青年にゲストスピーカーとしてお越しいただいている。
- お二人の報告を踏まえ、ふるさとづくりの広がりについてさらにご審議を深めていただき、来年度の新たな施策展開につなげていきたいと考えている。
- 次回の第3回部会では、第10期県民生活審議会の提言に向けた骨子案をお示しし、議論を深めていただきたいと考えている。

（2）審議事項について

（部会長）

- 第10期県民生活審議会では、ふるさと意識とふるさとのための活動の相互サイクルが促されるためのしかけや、ふるさとづくりが広がるための具体的な取組方策について審議している。
- 前回の総合政策部会では、若者の地域参加という視点が重要であることをご指摘いただきました。
- 本日はそれを踏まえ、若者の地域参加をどのように促すか、若者の能力や個性を地域社会にどのように活かすか等を検討するため、お二人のゲストにお越しいただきました。
- お二人には、後ほど、普段の活動についてご紹介をお願いしたい。

(事務局説明)

- 事務局から資料に基づき説明

(3) ゲストスピーカー報告

(伊丹商店連合会)

〈活動紹介〉

- 伊丹商店連合会は、市内の様々な商店会や商店街などをまとめている団体である。
- 伊丹市は空港があるので、大阪にあると思われている方もいるが、兵庫県の端で、尼崎の北に位置している。
- 伊丹は今、外から注目されており、様々なイベントがまちを盛り上げている。
 - * イタミ朝マルシェ
みんなで朝ご飯を一緒に食べることを通じて、横のつながりをつくっていく。
 - * 伊丹まちなかバル
飲食店を飲み歩きしながら、そのまちの食事やお酒を楽しむ。関西で最初に伊丹が始めた。100店舗以上が参加して、大人気のイベントになっている。
 - * 伊丹郷町屋台村
個人の飲食店が、自分たちでやりたいものを自主的に企画したもの
 - * その他
鳴く虫と郷町、はたら子、クラフトアートマルシェ等
- イベントやダンスと関わることになったのは、高校生の時に高校生主催の音楽イベントを友人と企画・開催したことで、バンド、DJ、ダンス、お笑いといった内容のイベントを高校生が企画し、高校生が出演した。伊丹にある全4校の高校生が集結し、大人が関わらずに自分たちだけでつくりあげた。
- ふるさとへの愛着のキーワードは「高校生」と思っており、親から離れて初めて自分たちで開催する催しは、高校生にしか出来ないのではないかと思っている。中学生は親がついてくるので、高校生になって初めて、自分たちだけで自立して出来る年代になるのではないかと思う。
- まちがもっと高校生、若者に対してバックアップをして、発表の場などをつくったら、すごく面白いまちになるのではないかと思っている。
- 大学生になれば、まちを出ていく人も多く、いろいろな地域の人たちとふれ合うことが増えるので、地元や自分たちの生まれ育ったところで遊ぶ機会は減ると思う。

〈活動を継続していくポイント〉

- 成人式のアフターパーティーを20歳の時に企画・開催し、大盛況であった。
- 企画した理由は、高校の時に音楽のイベントを開催した経験で学校の枠を越えた横のつながりがあったが、成人式が終わった後は、大抵、中学校や高校の同窓会など限られた交流しか出来なくて、それが残念だと思っていた。そこで、伊丹市全体で一斉に出来たらいいのではないかと思った。ダンスやビンゴ大会など、様々な企画をして、自分たちのしたいことを自分たちでつくり上げた。
- 次の年の人たちからも「したい」との声が出て、今でも毎年続いている。始めは250人ぐらいの参加だったが、現在は400人を超えるようなイベントになっている。
- 1つ下の年代からは、「こういったアフターパーティーをしないか」と、その年代の

キーマンとなるような人たちに声かけして実行委員会をつくり、その年代がしたい事を企画してもらうようにして続けている。

- このことが、自分たちで企画することの楽しみや、自分たちの年代の人たちを楽しませることの面白さを感じる機会になっているのではないかと思う。
- これらを通して「もっとこのような事をしてみたい」という声も増えている。

〈ふるさとづくり青年隊事業（音楽交流イベントの開催）〉

- 伊丹を盛り上げているイベントはたくさんあるが、阪急伊丹、JR伊丹の駅周辺ばかりで、そこから離れている地域では温度差があり、駅前はかなり盛り上がっているが、それが伝わっていなかった。他にも、20代のまちおこしへの参加が少ないといった現状もあった。
- こうした点を踏まえ、若者も楽しめて、中心市街地ではない地域まで取り込んで活性化できるようなイベントが出来ないかと考えた。
- 伊丹の真ん中に昆陽池公園があり、駅からは離れているが、伊丹では中心に近いところである。そこは自然あふれる公園で、ここで野外音楽フェスをしたいと考えた。
- 音楽イベントがどのようなものか、伊丹の現状がどうなっているのか。2回、勉強会をした。1回目は、伊丹でイベントを企画している中心人物の方に伊丹の現状をお聞きし、2回目は、野外フェス研究家の方に野外フェスの現状を学んだ。そこで、若者は楽しいものには敏感で、そこに集まってくるといった点を、理論的な部分を踏まえて、この勉強会で実感できた。
- このイベント企画を何とか成功させたいと思い、市長に直訴に行った。行政の担当者との話し合いの中で課題がたくさん見付き、難しいこともあったが、開催が決まったとの報告をいただいた。
- 行政の大きな壁を感じていたが、伊丹商店連合会長にサポートをいただき、道を作ってもらえることによって、頑張ったら出来るのではないかという気持ちになった。

〈まとめ〉

- どうすれば若者がまちに参加するのかという点では、自分自身も、先に経験されている方のバックアップや、「おまえ達でも出来る」と言ってくることによって、すごくやる気になった。そういったことが自信につながり、もっとこうしていったらいいのではないかと、といった提案がしやすい環境になるのではないかと考えている。
- 今後の展開としては、伊丹商店連合会の青年部を設立して伊丹全体の活性化を展開し、ふるさとを盛り上げていきたいと考えている。

（大路未来会議）

〈活動紹介〉

- 昨年4月に大阪から丹波市の大路地区に移住し、シェアハウスに住んでいる。
- 大路地区は、高速道路や駅から車で15分から20分ぐらいの所で農業が盛んである。
- 現在、地域のコンビニでアルバイトをして生活に必要な最低限のお金を稼いでいる。残りの時間を、丹波だからこそという経験に視点をあてて活動している。
- * あそびの学校

大路未来会議で最初に行った事業。丹波地域を中心に西宮市や朝来市などから子ど

もを集めて、森で自然教室を開催

- * 大路週末バル
居酒屋のようなコミュニティスペースの運営
- * 丹波市市島町の災害復興支援活動
- * その他

丹波地域で自営業をされている人のドライバーや手伝いなど。話をしている中で、その人たちが経験したことなどを教えてもらっている。

- 丹波は、仕事で得たお金でサービスを買って得られるものよりも、そのようなものでは得られない経験が多く出来る所だと感じている。
- 現在、月1万円以下で生活をしている。しかし、貧乏生活ではなく、知っている人が作っている米・野菜を食べて、人にも恵まれて、土地柄も恵まれていて、すごく豊かな田舎の生活を送っている。
- このような生活ができる基盤として、シェアハウスでの生活が重要となっている。「風を通してくれたらいいよ」といった持ち主の厚意により借りることができた。
- このようなケースはめずらしく、丹波には、持ち主が分からない、先祖のお墓が近くにある、仏壇が家にあるなどの理由から手放すことができない空き家がたくさんある。しかし、都会から来たよく知らない人には貸せない、といった意識があって簡単に借りることが出来ず、それが住居として空き家が活用しづらいという要因でもある。

〈若者の価値観〉

- 最近、多くの若者が都市部で生活することに少し違和感を覚えている。都市部では、給料をもらっても家賃や光熱費など固定費でほとんどが無くなってしまい、貯金もほとんど出来ないことがある。また、不況で本当に仕事が続けていけるのか、将来どのようになりたいという明確な目標はないけれど、何か分からないという不安感を抱いている人が多いと思う。
- そうした背景もあり、若者の中で田舎にスポットが当たり始めた。フェイスブックなどの活用で地域からの発信力がついてきて、若者の目に留りやすくなったと思う。
- そのような人たちの理想的な田舎の暮らしは、食べるものは自分たちで作ら余った近所におすそわけやシェアをする。日が昇ったら活動を始めて日が暮れるにつれてスピードを緩めていくという、自分の手の届く範囲で出来る生活。不安感のない、自分ですべてわかるシンプルな生活である。

〈ふるさとづくり青年隊事業（大路地域交流プロジェクト）〉

- 方丈記の作者である鴨長明が、800年前に住まいである方丈庵でそうしたシンプルな生活を実践している。旅に出るのですぐに動かせるように、基礎を打たず石の上に土台を載せているだけで、そこで寝食や客人のもてなし、執筆活動、仏教の修行もすべてまかっていた。都の華やかな暮らしとは違う、季節ごとに趣の深い暮らしとか、何のためらいもなく自分に正直になれる家と言っていたようである。
- こうしたシンプルな暮らしこそが、昔ながらの田舎暮らしの理想の原型であって、これから向かっていくヒントなのかもしれないと考えている。そして、方丈庵のような住まいを現代で提唱している例があり、それが、私たちが挑戦しているモバイルハウスという手法である。

- 長野県ではシャンティクティという、パーマカルチャーを実践するコミュニティがあるが、そのモバイルハウスはエコで持続可能なもので、ソーラーパネルがあって電力は自給し、貯水タンクもある。煙突は部屋を暖めたり、食事を作るのにも使える。また、海外でもタイニーハウスという名前で注目されている。
- こうした情報や知識を踏まえ、丹波でも現代版方丈庵のようなシンプルな暮らしが出来るのではないかと、また、そのような暮らしを発信することが地域づくりにつながられるのではないかと、丹波でも地に合ったモバイルハウスを作ろうと考えた。
- モバイルハウスは丹波の木材を使うことが大前提で、丹波で暮らす建築士の方に設計図を書いてもらい、丹波で暮らす大工さん主導のもと、何が必要で何が不要でないかを全員で考えながら建てている。
- 今回のような暮らしを考えることは、移住に関する課題の解決にもつながるのではないかと考えている。

〈まとめ〉

- 大切なことは、同じ志を持った仲間や周りで応援してくれる人がいる環境である。
- 応援してくれる方々は、丹波から出て丹波に戻ってきた人が多く、生まれた場所をどうにかしたいという思いがあり、若者と一緒に活動しようと、地域の人に自分たちを紹介してくれたり、雇用なども声をかけてくれる。
- そうした方々から受けた恩恵を、仲間と一緒に地域に還元していこうというのが、若者が地域に入って活動するきっかけやモチベーションになっていると思う
- 一番の課題は、若者が活動するにはお金が無いということ。お金がないからといって「あげるからどうぞ」というのではなく、「自分たちが主導でやっていく」といった意識を持つたくましい人が地域には必要で、そこにうまく具合にお金が絡んでくればいいのではないかと考えている。

(4) 質疑応答・意見交換

(質疑応答)

- Q** 新しい人が出たとき、最初、地域はけん制しがちだが、そこをどう入り込んでいったのか。若者がやっていけるには、ある程度の寛容さのような、地域の側の必要条件のようなものがあるが、そこはどう考えておられるのか。きっかけみたいな事もお話いただきたい。
- A** 中心市街地でダンススクールを始めたきっかけがあった。中心市街地の広場でダンスイベントなどをしたかったが、自分たちの思いだけを伝えても出来ないと思っていたので、イベント関係のボランティアに応募し、積極的に参加して関係をつくった。
- A** 一緒に活動をしている元々から地域にいた人たちが「この人たちはこのような事がしたいからここに来た」とうまく紹介してくれて、その上で自分たちが自己紹介をした。しっかり説明することや、「ここで、こういう事をしたい」とアピールすることが大事だと思って活動している。
- Q** 空き家があっても新しく来た人になかなか貸してくれない、といった現状をどうやって解決されたのか。

A 空き家を活用する流れが確立されてはいないが、それぞれの地域で活動や仕事などをする中で、地域との関わりができてくると、「うちに住んで」と言ってくれ人がたくさん出てくる。そうすると、ここに移住したい人がいたら紹介出来るようになっていくのではないかと考えている。

Q 活動しているのを見て「うちに住んだら」と言われるようだが、その地域へ行った時にすぐに家は見つかるのか。

A 何人も受け入れる体制はないが、自治体が空き家調査をしているので、それが終わって公表するようになるのであれば、そうしたシステムを作りやすくなるのかなと思う。今は地域に興味を持ってもらうことが自分たちに出来ることだと思っている。

Q ご自身は何がきっかけだったのか。

A 近くで農家レストランをしている人がかつて神戸に住んでいて、丹波に移住するためNPOで仕事をしながら知り合いを作っていた。その人の弟も丹波に来て、兄はレストランが立ち上がり（部屋が）空くので、その流れで呼ばれて一緒に住んでいる。

Q いろいろなキーワードがある中で、若い人についてのキーワードはダンスではないかと思っているが、最近の中高生のダンス事情を教えてください。

A まちのイベントに欠かせないものになってきている実感はある。どちらかという小中学生が中心であり、なぜかと言うと、何かをしてくれという時に、子ども達が短時間でもぱっと出来るものの1つにダンスがある。そういった形で地域とダンス、若者がつながりやすいきっかけ・になっているのかもしれない。

Q 伊丹でダンスに加わっている人数はどれぐらいか。

A 伊丹わっしょいというイベントが毎年2回あり、会場が1000人ぐらい入る大きなホールなので、かなり多い人数が関わっていると思う。いろいろなジャンルのダンス、踊りがそこに集結している。

Q イベントは地域外の人たくさん参加しているのか。また、若い人でなく、年配の人、年齢層の違う人たちがどのような形で参加しているか。

A 今回の中心市街地以外を活性化しようという企画提案をした時に「すごく面白い」という声が多かった。年齢層に関しては各年代が各年代の面白いことを企画していくべきで、やんわりいろんな年齢の人たちを対象にするイベントばかりが増えると、コアな面白さ、飛び出た面白さというものを作りにくいのではないかと考えている。

Q 県や市が委員会などを開くときに、どうすれば若い人たちに参加してもらえるかがポイントで、時間帯や曜日を変えたりしたが、それほど成果があがっていない。このような行政の企画と一緒にやろうという気持ちはあるか、また、どういう形で変わればやってみようと思うのか教えてください。

A 個人としては、やっていく気はすごくあるが、どのような形で若者に来て欲しいかが見えない。しかし、どうやって20代、30代と接点を持てばいいのか分からないという声を聞いたことがあり、それも理解できる。そこをどうリンクさせるかは、イベントの実行委員会の人を集める作業では、10歳ぐらい離れた人たちの層と関わる機会を作らなければならないので、ロコミで面白い人がいないか自分が駆け回って紹介し

てもらって、「このようなことをやってみないか」とひたすらプレゼンしている。

Q 今の話を聞いて、県側はどう思うか。

A 行政の会議は昼間の時間に開いている事が多く、なかなか若い人が来にくい設定になっているので、そういったことが課題であると思う。これからどうやってこのような若者の人脈とあたるのかといえば、行政が情報を集めることが重要である。委員としては難しくても、ふるさとづくり青年隊事業のように、若い人が自由に活躍できる場をつくり、アピールしてもらおうというのも大事だと考えている。(事務局)

Q 活動する上で、県庁や市役所に何をして欲しいか、どのような期待をしているか。

A 自分たちが何かをしたいと思って、その情報が行政に入って「どうですか」と言ってもらえると、行政が何をして欲しいかということを決み取りながら活動できる。そのようなタイミングを見ていただきたい。

A 一番は、許可をもらえること。担当者も難しい立場だとは思いますが、自分たちが希望を求めていることに対しての回答が納得いかないものだと、行政に対して光がないのかと思ってしまうので、一度やらせてもらって、失敗を寛容に見てもらえるのであれば嬉しいと思う。

Q 丹波市は大阪、京都、神戸からも近く、比較的文化的にも高いところだと思うが、地域性というものはあるのか。都会に近いから丹波市を選んだということはあるのか。

A 都会に近いから選んだということは個人的にはない。丹波市は元々6つの町でそれぞれに地域性があると聞いていて、確かにそれを感じている。今、若者がそれぞれの地域で交流を持って、それが若者という線でつながることが出来ていっている。

Q この10年、20年、特にインターネットが出てきてから、同じ若者という中でも世代間の差をすごく感じているが、自分の世代から下を順々に見てきて、そういった変化や、世代間の差を感じることはあるか。

A 昔より海外の情報が入ってくる機会が多くなり、特にアジアなどに気軽に行ける環境が整っているので、ボランティア活動などに積極的に参加している人が多いのではないかと感じている。ゆとり世代に対してネガティブな意見が多いが、逆にゆとり世代のメリットの部分で年配の方が意識して見ようとしてもらえると、世代間の差はよりいい関係になっていくのではないかと感じている。

A 高校生は最近、地域づくりに興味が出てきていて、参加もしている。また、20歳以上になっても、独身と家庭を持っているのでは全然違っており、30代の人でも独身の人はすごくフットワークが軽く新しいことを始めたりしているが、家庭を持っている人は、その分、引いて活動している感じにはなっている。

Q いろいろなイベントに子育て世代を巻き込んでいかないと、子どもたちに、自分たちが住んでいる地域がこんなにすごいことをしている、こんなことを思っている人たちがあると伝えられないと感じており、子育て世代をイベントに巻き込む方法を知りたいと思っている。

Q お二人とも「こういうことをしたい」という思いがはっきりあって、動き出したら仲間や応援してくれる人が出来て、魅力的だからそれが広がって、いい連鎖があったのかなと思うが、必ずしも若い世代の誰もがやりたいことを明確に顕在化して見えているとも限らず、地域に関わる気持ちがあまりない人もたくさんいると思う。そうした、まだ埋もれている人たちが何かやってみようかな、面白そうだな、関わりたいな、となるきっかけとして、今後、どの辺りが期待されるか。

A 自分自身は明確にこれがしたいという事はほとんど無くて、「こんなのどうだ」と言われて、面白いなと思って今は活動している。たまたま自分たちがいる地域で世話をしてくれる人がいて、恩恵を返していかなければならないという思いで、自分たちがしたい面白い事をし、それを発信していくことが大事だと思っている。

A 明確になっていない人に対しては「こんな面白いんだ」とプレゼンをひたすらしている。自分発信で活動する人は減っているが、機会が与えられて、面白そうだなと思って、やってみて自信がついて、次に自分たちでやっていくという可能性はあると思う。まちが寛容な気持ちで失敗も恐れずに見ていただけたら、いろいろな経験が若いうちにそのまちで出来て、まちに対しての愛着もわくし、失敗も含めて横や縦のつながりも出来てくるのではないかな。

子育て世代との交流は、実行委員会に参加してもらって意見交換するのが理想であり、子育て世代のリーダーが現れたりすると、そのような接点を持ちやすくなるのではないかなと思っている。

(意見交換)

〈キーワードは“高校生”〉

- 高校生をまちがバックアップして活躍の場を、という言葉に衝撃を受けた。それは大学生かと思っていたが、確かに、高校生が地域づくりに活躍していることもあるので、もう少し高校生を引っ張り出すのがいいのかなと思った。
- ふるさとづくりを考える時に、高校生がふるさと、地元に着しているという、高校生がキーワードであることに気づけなかった。

〈新しい価値観や社会システム〉

- 今日の話聞いて、私たちは、若者というものを平均でとるのは捨てて、新しい価値観を持った、新しい動きの、そのことを若者の動きとして捉えていく大胆さが必要なのかなと思った。
- イタミ朝マルシェを見に行っているが、同じマンションに住んですれ違っても話をする機会のない人たちが、一緒に座って朝ごはんを食べながら話をしているとある種のコミュニティ感を感じると言っている。これぐらい人がある種の求心力を持って座っていることは、何かに影響してくるのではないかなと思う。
- 子育てや介護を全部ひっくるめた家事について、地域として社会として評価する仕組みが出来れば、そういった人たちが外に出てこられて、その人たちの代わりにお世話をするようなことが社会的なシステムとして出来る方法があるのではないかな。

〈応援する人たちが重要〉

- シンプルライフやスローライフのような生活が出来るのは、外からのサポートがあってやっていけて、サポートに対して、お返しをしなければならないというお話があったが、そういった意識を持って自分たちのやりたい生活を追求しながら、サポートして下さる人たちの恩恵に対して還元する方法が必要なのかなと思う。
- それぞれの世代をつなぐような人たちが必要なのではないか。世代だけではなく、違うグループの人たちや価値観の違う人たちがお互いを理解しあって、許容出来るようにするコーディネーターの人たちを見つけてアピールしていくのも必要だと思う。
- 「応援する人たち」、「面白い、と言ってサポートしてくれる人たち」を、私たちがどういった形でつくるかが、今後のふるさとづくりの課題になるかと思う。

〈行政の役割〉

- 行政はルールを決めておいて、そのルールのもとで提案してもらって、その提案に基づいて何かやっていけるといったような、許容の範囲を広げていく必要があるのではないかなと思う。
- 行政というのは、演じるのではなく舞台装置をつくる方で大道具屋、小道具屋である。だから、大道具、小道具としていいものをどう作っていくかが、こういった審議会の課題になっている。

〈ふるさととの定義〉

- 前回の会合で、ふるさとづくりに「新しい」等の形容詞をつけるべきではとの問題提起があったと思うが、その辺りが反映されていないのではないか。
- 「ふるさと」について1～2行の定義が欲しい。この定義が他の部局も参考になる、ここで言っているふるさとの意味だというものを検討する必要がある。

〈今後の検討方向〉

- ふるさとに対していい変化がかなり出てきているので、それを踏まえて検討方向を考えるには盛り込みが少ないのではないか。例えば、社会背景はネガティブな話、マイナス方向の話ばかりなので、むしろ、多様な価値観がブレイクしてきているとか、そのようなことももっと積極的に入れてもいいのではないか。
- ふるさとづくりの展開でもネガティブな話ばかりだが、一方でNPOやボランティアとかそういった若い人が自発的な活動でどんどん出てきているということも入れていくべき。
- 地域の寛容性みたいなものがあるって若い人がどんどん出て行けるので、全体的に寛容性のような話であるとか、多様性の尊重であるとか、ユニバーサル社会、そのような事もふるさとづくりの中にどう盛り込んでいくのかといった視点が必要ではないか。
- 阪神・淡路大震災後につくられた仮設や復興住宅では、40%以上の高齢社会が出来たが、そこに何の関わりも無い人たちが集まって、生活してきた実績がある。高齢化をネガティブな捉えかただけではなく、そこを活かしていく方法を積極的に考える必要があり、実績をアピールする機会がここに出てくるのではないかなと思っている。

(5) 企画県民部参事挨拶

- 本日は長時間にわたり、熱心なご議論をいただきお礼申し上げます。
- 本日の論点は、若者とこれまで地域活動への参加が希薄であった層が活躍できる地域社会づくりの方策ということで、初めての試みであったが、ゲストスピーカーとして若い方にご報告いただき、大変参考になった。
- 報告の中で、フェイスブックで知り合った、知らせたといったことが出てきたが、私たちの世代はインターネットに疎くて広報が行き届いてないことがあるかもしれず、考えさせられる事が多かった。
- 若者でも高齢者でも、何かを決めつけしないで、自主的に取り組んでいける新しいモデルを発掘できるよう、出来るだけ動きやすいような方策を検討していくことが必要といったご示唆もいただいた。
- 本日のご意見をまとめ直していくので、次回も忌憚のないご意見をいただくよう、よろしく願いしたい。